

国宝 当麻寺西塔納置舍利容器について
【報道発表資料】



平成30年11月14日

當麻寺
奈良県教育委員会
奈良国立博物館

国宝当麻寺西塔の舍利容器の発見状況および納入状況について

当麻寺の沿革

当麻寺は聖徳太子の御弟麻呂子親王を本願とし、天武天皇の御代（673-686）に河内山田郷にあった万法蔵院から現地に移したと伝えられる。現地に移建した年代については、『建久御巡礼記』（1191）では“白鳳九年辛巳”（辛巳は天武天皇10年=681）、『当



国宝当麻寺西塔 修理前全景(北西より撮影)



心柱と心礎

麻寺縁起』（1237）では“朱鳥六年辛卯”（辛卯は持統天皇5年=691）とし、一定しない。

国宝当麻寺西塔の沿革

西塔は金堂の南西にあって、二上山の南から東に延びる尾根の北斜面を造成して建てられている。高さは基壇下から礎石まで1.1m、礎石上から宝珠頂部まで24.1mである。建立年代は三手先組物の形式から平安前期とみられており、平成12年に実施された防災設備工事に伴う発掘調査の結果、西塔の整地層から9世紀後半代の土器が検出されていることもこれを支持している。ただし、当麻寺創建期（7世紀後半）の瓦も西塔の整地層から出土しており、心柱と心礎の形状の不一致から現西塔が創建のままではなく再建されたものとする足立康の説（「当麻寺西塔に関する疑い」1933）は否定されるものではない。

修理履歴は伏鉢銘により、建保7年（1219）、慶長18年（1613）、正保3年（1646）、明和3年（1766）、大正3年（1914）が知られる。

平成の修理事業

今回の修理工事は、屋根瓦および基壇外装の破損があったことから修理方針を屋根葺替及び部分修理とし、平成28年6月から事業を開始し、平成28年度は地質調査と素屋根の建設、平成29年度は構造診断と屋根瓦の解体、今年度は屋根瓦葺工事及び外壁漆喰の塗直しに着手しており、今後避雷設備復旧、素屋根解体および敷地の現状復旧を予定している。平成31年度は基壇外装の解体、発掘調査、基壇外装の組立てと外構整備を予定しており、平成32年度に現場進入路の復旧、共通仮設を解体し12月末に事業

完了する予定である。総事業費は約4億円を予定している。

舍利容器の発見状況

平成29年度の屋根瓦解体工事に先立ち、相輪の破損状況を調査したところ、露盤の傷みが著しく、水煙には欠失がみられ、宝輪も後世の姑息な修理がみられたため、これらを解体し破損調査を行うこととした。

平成29年7月10日に宝珠・竜車・水煙および頂部の檼管を解体した。すると心柱の頂部が現れ、その上端に木製の蓋が嵌め込まれているのを確認した。

明治44年から大正3年にかけて天沼俊一を監督技師として西塔が修理されているが、その際に心柱頂部から舍利容器が発見されたこととそれを再度納入したことが『考古学雑誌』第3巻第1号および『史跡と美術』84号に記されている。

蓋の下にその舍利容器と納入物が納められていることは明らかで、保存状態を確認する目的で同日木蓋を取外し、中を確認した。

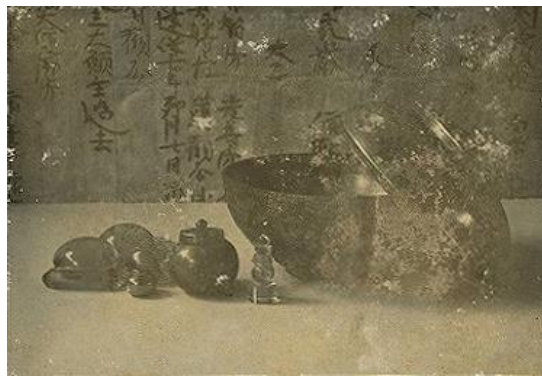
すると木蓋の大きさとほぼ同じ大きさの円孔が心柱上端から17センチの深さまで掘り込まれ、その中に直径12.2センチ、高さ14.2センチの銅筒が納められていた。これを取り出し、写真を撮影しながら納入物を慎重に取り出した。納入物の保存状態は大正修理時に撮影された写真から当時の状態を留めているとみられた。

舍利容器および納入物の納入状況

舍利容器および納入物の納入状況は別添資料のとおりで、銅筒の中に金銅製容器、銀製容器、金製容器が入れ子式に納められていた。これら3つの舍利容器は納入物から考えて、先述の雑誌に天沼が記した通り



国宝当麻寺西塔 相輪



大正修理時古写真(西南院蔵)



銅筒納入状況

舍利容器とみられ、特に銀製容器の形状は加守古墓より発見された金銅製骨蔵器（重要文化財）と形状がよく似ており、8世紀初頭まで遡るものと見受けられた。舍利容器が仮に飛鳥時代後期あるいは奈良時代前期のものであったとすると現在の西塔の建立年代と齟齬が生じ、足立康が指摘した再建説が現実味を帯びてくる。心礎の形状や発掘調査の出土遺物からもその可能性は指摘されている。

舍利容器及び納入物の調査

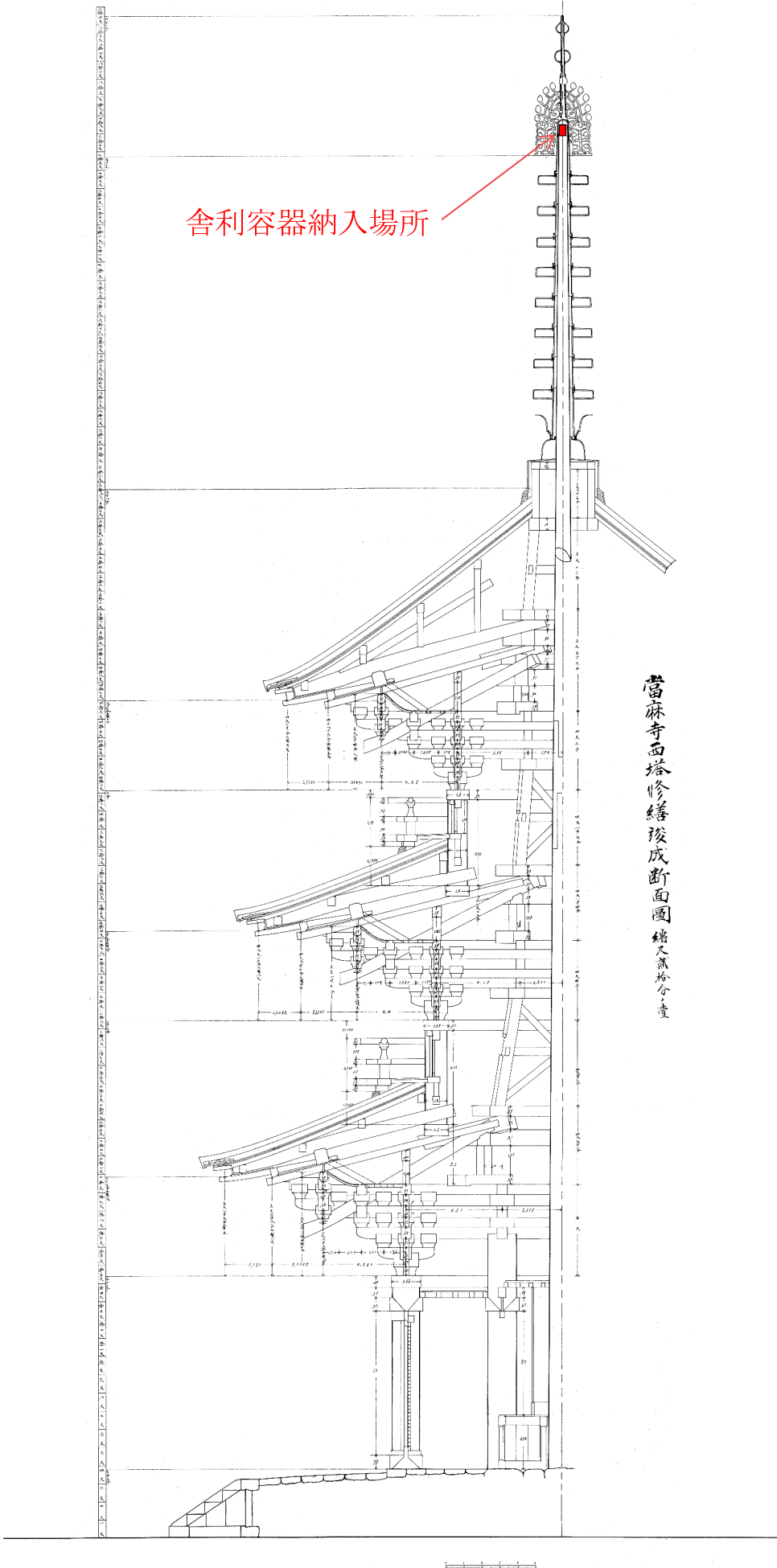
納入物の制作年代は、西塔の建立時期や修理年代を知る重要な手掛かりとなるため、舍利容器研究の第一人者である奈良国立博物館学芸部長の内藤栄氏に相談し、平成29年11月2日、舍利容器と納入物一式を奈良国立博物館に持参し、内藤学芸部長に調査を依頼した。調査結果については奈良国立博物館より報告がある。

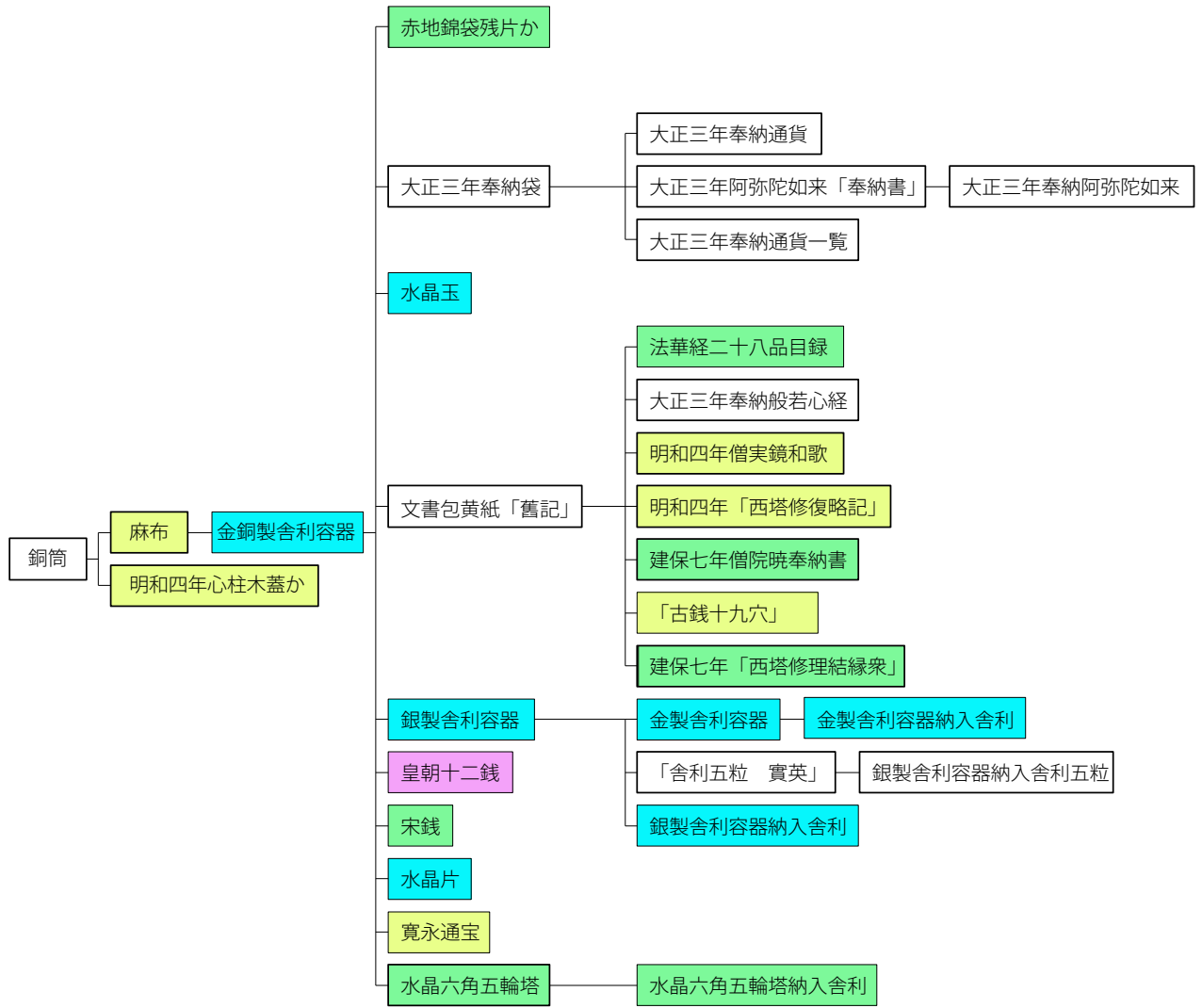


金銅製舍利容器内納入状況

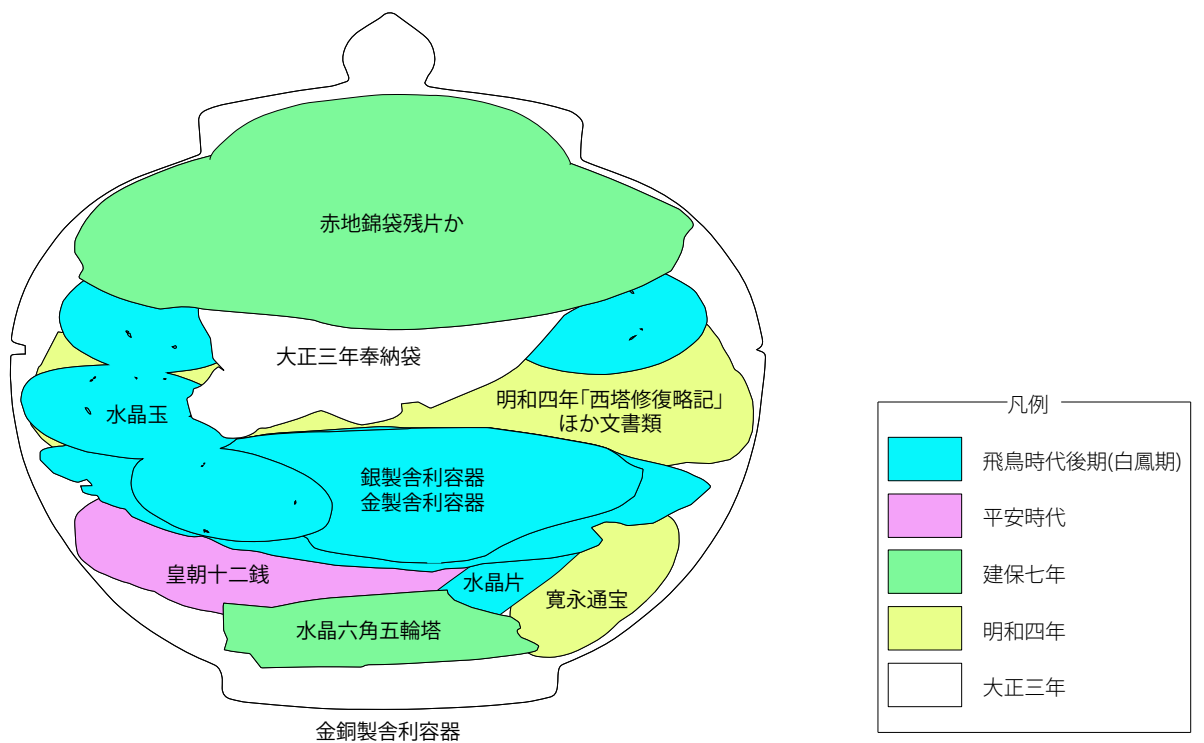
舍利容器納入場所

菅麻寺西塔修繕竣成断面圖緒大藏拾分壹





※原則として納入状況に倣い、上に位置していたものを図の上から配置した
 ※太枠は納入時期が明確なもの
 ※題があるものは「」で示した



納入物一覧

名称	主要材質	納入比定年代	数量
金製舍利容器	金	(飛鳥時代後期(白鳳期))	1
銀製舍利容器	銀	(飛鳥時代後期(白鳳期))	1
金銅製舍利容器	銅	(飛鳥時代後期(白鳳期))	1
金製舍利容器納入舍利	ガラスか	(飛鳥時代後期(白鳳期))	1
銀製舍利容器納入舍利	ガラスか	(飛鳥時代後期(白鳳期))	1
水晶玉	水晶	(飛鳥時代後期(白鳳期))	6
水晶片	水晶	(飛鳥時代後期(白鳳期))	1
皇朝十二銭	-	(平安時代)	10
建保七年僧院暁奉納書	紙	建保七年	1
建保七年「西塔修理結縁衆」	紙	建保七年	1
水晶六角五輪塔	水晶	建保七年	1
水晶六角五輪塔納入舍利	不明	(建保七年)	1
赤地錦袋残片か	不明	(建保七年)	-
法華經二十八品目録	紙	(建保七年)	1
宋銭	-	(建保七年)	9
明和四年麻布	麻布	明和四年	1
明和四年心柱木蓋か	ヒノキ	明和四年	1
明和四年僧実鏡和歌	紙	明和四年	1
明和四年「西塔修復略記」	紙	明和四年	1
「古銭十九穴」	紙	(明和四年)	1
寛永通宝	-	(明和四年)	7
金製舍利容器包紙	紙	(明和四年)	1
銀製舍利容器包紙	紙	(明和四年)	1
大正三年心柱木蓋	ヒノキ	大正三年	1
銅筒	銅	大正三年	1
大正三年奉納袋	絹	大正三年	1
大正三年奉納阿弥陀如来	不明	大正三年	1
大正三年阿弥陀如来「奉納書」	紙	大正三年	1
大正三年奉納通貨	-	大正三年	23
大正三年奉納通貨一覧	横紙	大正三年	3
文書包横紙「舊記」	横紙	大正三年	1
大正三年奉納般若心経	横紙	大正三年	1
銀製舍利容器納入舍利五粒	瑪瑙か	大正三年	5

国宝当麻寺西塔納置舍利容器について

1、 舍利容器について

(1) 概要

当麻寺西塔の心柱最上部より金、銀、銅の三重容器等が発見された。以下、その形状、製作技法、特徴、類例作品等について記す。なお、長さの単位はセンチメートル、重さはグラムである。

① 金製舍利容器【図1】 一合

金製 鍛造

総高 1.2

身高 1.08 同最大径 1.38 同口径 0.66

蓋高 0.26 同径 0.80

重 4.57 (身 3.84 蓋 0.73)

三重容器の一番内側にある小型の金製容器である。内部に舍利一粒を紙に包んで納入している。おそらく当初よりこの容器に舍利が納入されていたと推測される。

身は球形で口に低い立ち上がりを作り、薄い円筒形の蓋を被せている。蓋、身とも金製、鍛造である。身は上下の部分

に作り、鑢付けにより接合している。身の底部にわずかな平面を作り、置いた時の安定を図っている。蓋内面に僅かに銀色の付着物があり、当初は鑢付けによって蓋と身を固着していた可能性がある。

なお、蛍光エックス線分析により、金属の成分は金 (Au) が約8割、銀 (Ag) が約2割と判明した。

本容器ともっとも形状や大きさが近似する舍利容器に、滋賀県大津市の崇福寺塔心礎納置品の国宝・舍利容器のうちの、金蓋碧瑠璃壺(滋賀・近江神宮所蔵)【図2】がある。本品の身は高台をつくらない球形で、口に低い立ち上がりを作る。身は吹きガラス技法による深緑色のガラスである。蓋は金製、鍛造で、薄い円筒形である。金蓋碧瑠璃壺は金製内箱に安置され、さらに銀製内箱、金銅外箱に入れ子式に安置されていた。金蓋碧瑠璃壺は身をガラス製とするが、蓋を金製とすること、入れ子式舍利容器の一番内側にある点など、西塔発見の金製舍利容器と近似する性格を有する。

崇福寺は天智天皇により天智天皇7年(668)に創建された、近江宮を鎮護する寺院である。塔の建立時期に関する史料はな



【図1】 金製舍利容器



【図2】 金蓋碧瑠璃壺
(近江神宮所蔵)

いが、壬申の乱によって近江朝が終焉を迎える天武天皇元年（672）以前であった可能性が高い。

② 銀製舍利容器【図3】 一合

銀製 鍛造

総高 3.1

身高 2.49 同径 2.97 同口径 1.65

蓋高 0.88（鈕含む） 同径 1.86

重 24.67（身 19.72 蓋 4.95）

金製舍利容器を納める、銀製、鍛造の蓋付き容器である。身は球形で口部に低い立ち上がりを作る。身は底部にわずかな平面を作り、置いたときの安定を図っている。蓋は宝珠をかたどった鈕（つまみ）を有する薄い円筒形である。身は上下を別々に作り、鑢付けによって接合している。蓋はつまみを別作とし、蓋裏でかしめ留めしている。蓋の内部には本体とは別の銀色を呈する材料が付着しており、当初は蓋と身を鑢付けして固着していた可能性が高い。身に



【図3】 銀製舍利容器

タガネ様の道具による損傷が認められるが、後世に舍利を拝見するために身を開こうとしたのであろう。

蛍光エックス線分析により、金属の成分はほぼ純銀に近いことがわかった。

本品と形状の近似する作品に、奈良県葛城市加守出土の金銅骨蔵器（重要文化財、東京国立博物館所蔵）【図4】を挙げることができる。底に高台を設けない球形の身に、宝珠形のつまみを有する浅い円筒形の蓋を被せる点がきわめて近似している。この骨蔵器は二上山の北東の裾野に位置する加守廃寺の背後の急傾斜地より昭和20年（1945）に発見されたもので、奈良時代後期（8世紀後半）を降らない時期の作と推定される。

また、三重県朝日町の塔心礎発見の滑石製有蓋壺（重要文化財、文化庁所蔵）は、底部に高台を有する点が異なるが、身は胴張りのある球形を思わせる形状で、蓋は宝珠形鈕を有する浅い円筒形であり、当麻寺西塔発見の銀製舍利容器や加守古墓出土の骨蔵器と近似している。縄生廃寺から出土す



【図4】 金銅骨蔵器
（東京国立博物館所蔵）

る瓦は7世紀後半から8世紀初頭のものであり、この寺の造営時期を知ることができる。

③ 金銅製舍利容器 【図5】 一合

銅製 鑄造 鍍金

総高 9.06 (蓋が完全に閉まらない状態)

身高 4.67 同径 10.14

蓋高 4.8 (鈕含む) 同径 10.05

重 701.21 (身 348.67 蓋 352.54)

やや上下につぶしたような、球形の金銅製容器。胴部のもっとも径の大きい位置を蓋と身の合口部とし、蓋側に立ち上がりを作る逆印籠蓋造とする。鑄造後にろくろ挽きによって形を整えている。身の底に低い高台を設けている。蓋は上部に一段の円形の段を作り、段の上面は中央がわずかに盛り上げ、中央に宝珠形の鈕を表している。

なお、蛍光エックス線分析を行ったが、鍍金が厚いため銅の成分を特定するには至らなかった。

本容器の形態上の特徴に、蓋に表された



【図5】 金銅製舍利容器

円形の段がある。この段は側面が垂直に立ち上がっており、壺の蓋を模したものと考えられる。たとえば、伝岡山県津山市出土の三彩蓋付壺（倉敷市考古館所蔵、奈良時代〔8世紀〕）や、和歌山県伊都郡一里山古墳出土の三彩釉骨蔵器（京都国立博物館所蔵、奈良時代〔8世紀〕）【図6】の蓋は側面が垂直に立ち上がり、中央に宝珠形つまみを表す。金銅製舍利容器は宝珠形つまみのある有蓋壺を模していると考えられる。

本品と近似する形の有蓋壺は、先述の二合をはじめとする奈良時代の三彩壺、そして東大寺金堂鎮壇具中の銀製鍍金狩猟文小壺（奈良時代〔8世紀〕）を挙げることができる。

本品は蓋内側に「本實 憲誉世話而納之」、身の内側に「明和四丁亥四月晦日納之」という墨書がある。これより、中之坊の本實と護念院の憲誉が世話役となり、明和4年（1764）四月晦日に舍利を西塔に奉籠したことがわかる。伴出の文書によれば、明和3年（1763）五月六日、西塔から「黄金に似た容器」が発見され、中に舍利を入れた



【図6】 三彩釉骨蔵器
（京都国立博物館所蔵）

「黄金の小壺」と「水晶の宝塔」が取り出された。「黄金に似た容器」とは金銅製舍利容器、「黄金の小壺」は金製舍利容器、「水晶の宝塔」は水晶六角五輪塔に該当する。金銅製舍利容器は研磨されてから墨書されており、明和の段階で汚れを取り除いたことがわかる。

(2) 三重入れ子式の舍利容器について

釈迦の涅槃について説く『大般涅槃経』によれば、釈迦の遺体は金棺・銀棺・銅棺・鉄棺という四重の棺に安置されたと伝えられる。古代インド以来、これに基づき、金・銀・銅などの素材による入れ子式の舍利容器がしばしば作成されている。西塔発見の三合の舍利容器は、鉄を除く三重の棺を意図したものであり、一具と考えて良いと思われる（ただし、金銅製舍利容器を納める外容器が存在した可能性は否定できない）。

わが国における金・銀・銅の三重容器の作例は、崇福寺塔心礎納置品の舍利容器（飛鳥時代後期〔白鳳期〕、7世紀後半）、法隆寺五重塔納置舍利容器（同）、大阪・三島廃寺塔心礎納置舍利容器（同）（東京国立博物館所蔵）がある。また、記録によれば天武天皇2年（673）に心柱が立てられた山田寺（奈良県桜井市）の五重塔の心礎には、瑠璃・金・銀・金銅の四重容器が納められた。飛鳥時代後期（白鳳期）には、金・銀・銅の三重容器をはじめ、入れ子式の舍利容器がしばしば造立されたことがうかがえる。しかし、奈良時代以降は舍利を塔に埋納することが

減り、作例及び記録上でも金・銀・銅の三重容器は確認できていない。

(3) 製作時期

金製舍利容器の形状が崇福寺塔心礎納置品の国宝・舍利容器のうちの金蓋碧瑠璃壺に近似していること、銀製舍利容器及び金銅製舍利容器の類例がいずれも奈良時代を下らないこと、金・銀・銅の三重入れ子式舍利容器が飛鳥時代後期（白鳳期）に多く見られ、奈良時代以降は作例、記録上も確認できないことなどを勘案すれば、西塔発見の舍利容器の製作年代は飛鳥時代後期（白鳳期、7世紀後半）と推定できよう。

鎌倉時代に撰述された『建久御巡礼記』によれば、當麻寺は白鳳九年（天武天皇10年〔681〕）に現在の地に移されたといい、実際白鳳期にさかのぼる国宝・弥勒仏坐像、重文・四天王立像、及び国宝・梵鐘を伝えている。西塔発見の舍利容器は、當麻寺の創建時にさかのぼる由緒を有す可能性があり、当寺の創建を考える上で貴重な資料とすることができると言える。

飛鳥時代後期（白鳳期）の舍利容器は、崇福寺塔心礎納置品の舍利容器のほか、法隆寺五重塔心礎納置の舍利容器（発見後再埋納されたため現在は見ることはできない）、岐阜・山田寺塔心礎発見の銅製舍利容器、奈良・法輪寺三重塔の銅製舍利容器、三重・繩生廃寺塔跡発見の舍利容器（文化庁保管）、大阪・三島廃寺塔心礎発見の舍利容器を挙げるにすぎない。このうち、山田寺と法輪

寺の品は銅製舍利容器を残すのみであり、当初からのセットを伝えている可能性がある品は、崇福寺塔心礎納置の舍利容器と三島廃寺塔心礎発見の舍利容器、法隆寺五重塔心礎納置の舍利容器だけである。

西塔発見の舍利容器は、金製、銀製、銅製の三重容器のセットが揃う飛鳥時代後期（白鳳期）の貴重な舍利荘厳美術の作例である。比較的簡易な作りの三島廃寺の舍利容器を除いて考えれば、崇福寺塔心礎納置品の舍利容器、及び法隆寺五重塔心礎納置の舍利容器と並び、わが国の舍利荘厳美術の劈頭を飾る貴重な作品とすることができよう。

2、複製の製作について

西塔心柱から発見された舍利容器等の納入品は、修理完了に合わせて心柱に再奉籠される予定であった。しかし、納入品のうち金製舍利容器、銀製舍利容器、金銅製舍利容器は、飛鳥時代後期（白鳳期）にさかのぼる可能性がある美術史上稀有な文化財と考え、再奉籠せずに保管し、広く公開することを奈良国立博物館より當麻寺に依頼した。その際、舍利は西塔に再奉籠する必要があるため複製品を作製し、それに舍利を納入して心柱に納める方法を提案した。當麻寺の理解と承諾を得、金製舍利容器、銀製舍利容器、金銅製舍利容器の複製を行うこととなった。

複製品製作に際し、「奈良・当麻寺西塔発見舍利容器のデジタル化と模造製作研究」

（研究担当者：奈良国立博物館）を立ち上げ、デジタル計測を用いた文化財の複製事業の助成活動を行っている、一般財団法人デジタル文化財創出機構より資金助成、及びデジタル計測に関するアドバイスを受けた。デジタル計測は奈良国立博物館において行われ、同館のCTスキャナ及び蛍光エックス線分析、凸版印刷株式会社による三次元計測を実施した。

複製品の製作は高岡鑄造技術を使い、金属造形作家の大江浩二氏が担当した。金製及び銀製舍利容器はデジタルデータを用いて雄型（蓋、身の上下の計3パーツ）を作製。その樹脂原型を元に木製の雌型を作製し、金板あるいは銀板を鍛造で成形した。金銅製舍利容器はデジタルデータを用いて鑄造用原型を作製し、それを用いてこめがたほう込め型法によって鑄造し、その後旋盤を行った。鍍金は株式会社小西美術工藝社が担当した。製作途中、奈良国立博物館において原品との照合を二度実施し、形状、鍍金の色などを確認した。なお、原品に見られる疵、歪みは複製品では再現せず、また原品では完全には閉まらない金銅製舍利容器の蓋も複製品では閉まるように修正した。

複製品は2セット作製され、1セットは西塔奉籠用とし、もう1セットは奈良国立博物館において原品とともに保管される。